



TITLE:

<批評・紹介> エーベルハルト著「内陸アジア遊牧諸民族における國家形成過程」

AUTHOR(S):

内田, 吟風

CITATION:

内田, 吟風. <批評・紹介> エーベルハルト著「内陸アジア遊牧諸民族における國家形成過程」. 東洋史研究 1951, 11(2): 176-178

ISSUE DATE:

1951-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138916>

RIGHT:

Wolfram Eberhard, Der Prozess der Staatenbildung
bei mittelasiatischen Nomadenvölkern.

Forschungen und Fortschritte, 25. Jahrg. Nr. 5-6, 1949 に掲載

されたカリフォルニア大学社會學部教授 W. Eberhard の本論文は數頁の小篇であるが、然しこれは氏の Die Beziehungen der Staaten der T'o-pa und der Sha-to zum Ausland (Ann. de l'Univ. d'Ankara, vol. 2, 1948), Some Cultural Traits of the Sha-to Turks (Oriental Art, Vol. I, 1948) 及び Das T'o-pa-reich Nord-Chinas (Leiden, 1949) 等々一連の北族史研究の成果並びに最近の歐米に於ける同方面諸研究を綜合して得た結論の要旨として注意されるべきものであろう。第二次世界大戰開始以來歐米に於ける東洋史研究の一新傾向は内陸アジアが、東或は西からの文化潮流の單なる導管であつたのではなく、アジア周邊に生起した高度文化は常に内陸アジアに發生した衝激に繰り返し繰り返し作用せられ影響せられたことを認識したことである〔著者はかゝる見地を最も明瞭にしたものとして W. Ruben: Fski Hint Tarihi u Indisches Mittelalter をあげてゐる〕。そのためにまた内陸ノマード文化其物に對する研究がリゲナ・グルッセ・ウィットフォーゲル・本著者エーベルハルト等の諸氏によつて強く推進せしめられた。(吾々は現在すでに例へば、中國古代史研究に於て封建國家より統一國家(秦)への發展の要因を考へる場合當時すでに封建諸侯の獨力を以つてしては最早抗禦し難いまで生長してゐた巨大な北方ノマード國家の存在とその本質を詳考すべき段階に達してゐる。)さて著者は中國インド等の高度文化の歴史との相關々係に於いて最近の中心問題は(1)ノマード諸民族が、それは小種族に分れて各自の墟邊に平和に暮してゐたのに、何故僅かの間に突然大集團に統合し、確固とした高度文化を打倒する力を得たか。(2)如何にして其ノマードンが高度文化を征服した後、或る期間被征服者の反抗による徹底的な脅威を受けることなく支配を維持し得るのか。而も突然無

力化し、屢々戦争もせずに退いて了ふのか、であるが、この問題に對しては先づノマードンの社會構造を明にし種族の性格を明にする必要があるとする。即ち「中亞の主要ノマード民族は言語上、インドゲルマン、トルコ、モンゴル、及びツングースに分類される（チベット族は副次的にのみ政治役割をなした）。文化的にもインドゲルマン的、トルコの（この二は馬飼養を特長とする）、モンゴルの（牛飼養）、ツングース的（豚飼養）北チベットの（羊飼養）に略々大別される。假に吾人がモンゴルの文化を語るならば、此の場合吾々はこの文化の保持者がモーク語を語るか乃至は語つたことを前提とすれば足るが、然し政治的圖象を考へる場合は複雑である。例へばデングス汗時代のモーク國家はモーク語モーク文化の黃色人種のモンゴルの國家と云得るか。フン、ウィグルは？ 元來、この種の國家は多數種族の連盟で、例へば拓跋では百以上の種族を包含し、その六〇%がトルコ、三五%がモンゴル、少くとも二種族がツングース、一種族はインドゲルマンである。實にかゝる種族連合體の性格は支配種族によつて與へらるべきである。それは連合諸種族が社會的に同位でなく、特にトルコ民族では純然たる貴族政體に發展してゐたからである。（そこには奴隸として連盟全體に奉仕する奴隸種族や、一種族或はその成員に隸屬した個人奴隸も存した）。従つて例へば拓跋は其連合諸種族の多數が言語的文化的にトルコ人であつたが故にではなく、其支配種族が言語的文化的にトルコ系であつたが故に、同様にまた匈奴も其單子種族がトルコ族であつたが故に拓跋及び匈奴、並にその後繼諸國家はトルコ系と言ひ得るのである」（大意・以下同じ）といふのであつて、其の所論は明快であり妥當である。尤も同時にかゝる性格づけが可能となつたのには各種族に對する近年の研究特に言語學的な研究の進歩に負ふこ

とを忘れてはならない。即ち拓跋の連盟種族が多數の異種族から成立してゐることは從來とても推察し得たが、著者が上掲の如く明瞭にその比率を數字で表はし得たのは、著者が集録した拓跋の一一九種族の族名に對する J. Bazin (Recherches sur les Parlers Toipa) の言語調査の結果であり、匈奴、拓跋兩支配種族をトルコ族と斷じたのも、單子の屬せる種族名「屠各」をトルコ語 turg (呪術者) と解する説、其他兩支配種族の言語を *preture* と見る學說に基くものであることを注意すべきであらう。

さて著者は本題であるノマードン國家の成立過程について大略次の如く述べる。即ち「總の種族は一定の牧畜區域、それは平原の冬の牧場と山地の夏の牧場（これは小規模な開墾地でもある）を有ち、冬牧場から山地への移動行進は多くの種族が協同的に行ふ。それが一定の神聖な場所での共同祭典を齎し、弛い非政治的な種族團體の形式を來たす。農耕國家とノマードンとの間の交易は専らノマードンの首長との間の國家專賣の形式で行はれたが、この場合（農耕國家は畜產物を必要としなが、ノマードンはミルクの得られぬ冬期の食糧を必要としたから）農耕國家は屢々政治的な手段として農產物價格の引上げ交換の閉鎖を行つた。私貿易では農民はクレデットによつてノマードンを隸屬化し、土地を收奪し、牧畜區域の狹少を來たした。この兩事に對するノマードンの反作用は農耕國への掠奪的襲撃である。襲撃團の統率者はやがて農業園を支配するの利をさとするか、或は農業園の反撃に對する精力的な防衛を餘儀なくせしめられるが、これには從來の種族結合では不十分である。そこで連盟の指導者は冒頓、チンギス汗、チムール、バブールの如く連盟成員の増加の爲に隣近諸種族の攻撃を試みる。これによつて連盟中に社會的階級が生じ（統率者の種

族の下に、從來彼等と共に遊牧してゐた諸種族が殆ど同種的に位置し、その下に最初に征服されたか自ら投降した諸種族が従ひ、最後に強制的に連盟に制壓されて奴隸として連盟全體に奉仕した奴隸諸種族、

古い種族システムは破壊され軍事的な單一體が組織され、ノマードン國家が成立する」と説き、更に農業國家への彼等の攻撃戰が何故に常に成功するか、農業地區占領後に於ける諸方策の相違（ナンギス汗、ナムールによる工匠以外の人衆皆殺、耕地の牧場化、拓跋初期の農耕人口の奴隸化と種族構成員への分配等）に言及し、最後にこれら征服諸王朝の滅亡の原因經過を概説してゐるが紙數の關係上こゝではその部分の紹介は割愛する。たゞ一言して置きたいことは上述のノマードン國家形成の過程は史料の豊富な拓跋朝、蒙古朝の場合等に於いて明かに認め得るものであり、従つて多くのノマードン國家成立の場合にも於いても當てはまる一種の「定型」と考へられるけれども、然し調査の進んでゐない柔然、匈奴等其他總ての場合に於ても完全に「共通的な過程」であつたか否かは猶今後一々史料によつて證明すべき點が残つてゐるのではないかと云ふことであり、かゝる意味からも護雅夫氏の近作「匈奴の國家」史學雜誌五九・五の如き基本的研究の續出が欲せられる（尤も、漢書に見ゆる匈奴の統治機構記事に比し、後漢書のそれが詳細である一因は後漢人が南匈奴を降し、之を管領して其機構を直接調査し得た爲であるに不拘、護氏が此點を考慮せず、兩書記事の差をすべて匈奴の統治機構の發展のためと連斷したのは妥當でない）。なほエーベルハルト教授の本論文は上述の如く全く要旨的な記述であるので、其眞意を十分に理解するには上掲 *Das Tobareich* の外、同教授の近著 *Chinas Geschichte* (Bern, 1948 pp. 404) の併讀が望ましい。（内田吟風）